ベトナム、アオザイ姿の美しい女たち

ベトナム視察旅行記（その1）

内山雄平

一、ドイモイ政策下の農業の実情を知るために

この八月一八日から二五日にかけ、全国農業教育研究会の主催（団員一〇名）でベトナムを訪れた。ドイモイ政策下のベトナム農業とその教育の実情について知るためである。ドイモイ政策というのは、一九八六年に提唱された経済社会の刷新政策のことで、最大のねらいはベトナム経済の再建にある。そのなかで農業は第一の戦線*と見なされている。

私たちは、以下のような視察・観光とベトナムの人々との交流をすることができた。

ホーチミン現地の稲作と野菜農家、農業専門学校（農業経営者育成機関）、メコン川クルーズ、果樹農家（パパイヤ、バナナ等）、クチの地下トンネル（ベトナム戦争時のベトコン居住地）、ホーチミン・ハノイ市内観光、ハロン湾（世界遺産）、ハノイ農業大学生（ベトナム唯一の国立高等農業教育機関）との交流。

今、ベトナムはドイモイ政策によって国の産業・経済が活気をおび、人々は生き生きと生活している。その様子について、第一回目の今回はホーチミン市とハノイ市民の暮らしぶりを見たまま聞いたまま報告し、

次回は農業問題としたい。

*人口の七割が農村部で生活し、国民総生産額の二五%を占めている。それまでの合作社による集団農業を解体、国営企業の独立採算制への移行、個人による経営を認め家族農業へと転換を図ることによって、生産意欲と効率性、採算性の向上を目的とする経済政策。また、土地所有制度は、合作社の管理下の農地を各農家に配分、私的所有権は認めないものの使用権の売買や相続を認め、実質的に土地所有権が農家に与えられた。

二、ホーチミン（旧サイゴン）市内の様子

私たちは、ホーチミン空港に到着後、最初の四日間を市内のニューワールドホテルサイゴンに宿をとり、ここからマイクロバスを利用して視察に出かけた。

毎朝五時になると近くの公園から聞こえてくる異様な叫び声に目覚めた。よく見ると老若男女がそれぞれ体操をしたり、公園の周囲をジョギングしたりして健康保持に努めている。異様な叫び声はどうもストレス解消のためのようだった。

商店と道路の間の舗道では、昼・夕方近くなると四～五人が車座となり、露天で食事をする風景によく出会う。これはベトナム（越南）を二〇〇年間植民地にしていたフランス流の名残らしい。

ホテル近くのドンコイ通りの大きな市場に出かけた。洋服、食品、靴・鞄、貴金属、おもちゃなどあらゆる商品が、通路せましとあふれていた。売り子の声が盛んに掛かる。娘に「ベトナムに行ったらハス茶を買ってきて」と言われていたので、ブリキ缶の容器で、値段の高いものから安いものまで並んでいるハス茶店に足を止めたら、早速、若い二〇才前後の女性三人が声を掛けてきた。一応正札は付いているが、売り値は客との駆け引きだとガイドに教えられたので、値引くよう粘ってみた。余りにも粘りすぎたせいか、日本語の上手な売り子の一人は、プイと横を向いて相手にしなくなった。残った二人は私の気を持ち直そうと優しく対応し、かなり値引いてくれた。後でやりすぎたかなと思った。

私は、ベトナムの山川の自然や田圃で働く人の風景が山水画に似ていてとても好きだ。そんな風景画を求めて店に立ち寄り、好みに合う絵を何枚か買った。刺繍で描いた絵も欲しかったが、その店には好みのものはなかった。すると、店のおばさんは、近くの娘の売

り場にも私を案内して見せてくれた。それでも断ったら、旦那とおぼしき人に指図し、刺繍の絵を沢山抱えて運んできて見せ、どうかと促した。結局、好みのものはなかった。

このように、市場で働く女性の、売らんかなという商魂の逞しさとしなやかさには恐れ入った。その一方、何故か商店街の男性の影は薄かったが、これまでの統制的な価格決定をやめ、価格と流通の自由化をすすめるドイモイ政策の一端を垣間見た思いであった。

ホーチミン市内やハノイ市内では、道路はバイクであふれていた。特に朝夕の通勤ラッシュ時の混みようはものすごい。五〇～一七五ｃｃのバイク（これ以上の排気量は禁止。警察のバイクが四〇〇ｃｃで、違反者のバイクを取り締まれないからだという）に二人乗りは普通で、中には夫婦・子ども含め三人乗りで走る。しかも、運転がとても上手で、お互いすれすれに走るのにバイク同士で接触することなく、信号機のないロータリ方式の交差点でも、方向転換は流れるように進む。市内で接触や衝突による事故には、一度も出会うことはなかった。

ちなみにベトナムの一日の交通事故による死亡者は、三〇人くらい。ただ、バイクを利用している年代は、ほとんど二〇～三〇代でそれ以上の年代層はあまり見られない。

このようにバイクが非常に多く利用されているのは、地下鉄がなく、路面バスも余り利用されていない事情によるようだ。タクシー代わりにバイクに乗せて貰う人も多い。一㎞二〇円（タクシー五〇円）、利用する距離はせいぜい二〇～三〇㎞範囲で、それ以上はバスを使う。四輪の普通乗用車やトラックはさほど走っていない。乗用車の価格が一台五〇〇万円で、所得に比して高価であることや道路が狭いせいでもある。

私がベトナム視察中一番感心したというか、見習いたいと思ったのは、女性の歩く姿と、普段着でも美しく装っていることだ。背筋をしゃんと伸ばしてバイクを運転する姿勢や歩行する姿は美しく、天秤を担いで果物を売り歩く女性を除けば、すべての女性がそうなのだ。しかも、贅肉をつけてよたよた歩いている人は皆無で、ほっそりしてスマートである。だからアオザイがよく似合うのだ。特に、高校に通う女生徒の制服は、真っ白なアイザイ姿で見ていて眩しいくらいだ。清純・清楚そのもので、いかにも女学生といった感じ

である。どこかの国の女子高校生には見習って貰いたいものだ。

三、ハノイ市内の様子

ハノイに滞在したのは三日間で、市内を観光したのは半日程度であった。国立の美術館や宮殿は、フランス風の建築様式である。このような建築様式は、町並みでも見られ、ここでもフランスの影響を強く受けていた。ハノイ市内の町並みはホーチミン市内より整然とし、しっとりとして落ち着いた感じを受けた。立ち並ぶ商店の間口は、三〜四メートル、奥行きが一五〜二〇メートルと決まっていて、二〜三階建ての煉瓦造りである。隣の建物との隙間がなく店がつながっている。農家の間口は八メートルと長い。家屋の建築様式は、中国の影響を受けており、寒くはなく夏は涼しいという。

市内の病院、学校、人民委員会（役所）、兵舎などは、最近建て替えたらしく真新しい。いずれの建物にもベトナムの国旗が掲げられ、国の施設であることを示している。

公共のデパートや、一般のスーパー店では、ホーチミン市内の市場で見られたような売り子の執拗さがなく、買いたければ売るという普通の態度であった。デパートの土産売り場の入口には案内人がいて、帽子を含め手荷物を預けさせられていささか驚いた。万引き防止策のようだ。

ベトナムのドイモイ政策は、ハノイよりホーチミンの方がより浸透しているように思われ、旧サイゴン政権時代の自由主義経済復活のように感じた。

四、私のもう一つの動機

先に述べたように、今回の視察旅行でドイモイ政策下のベトナム農業について知りたいと思った他に、私には次のような動機もあった。

私は、ベトナム戦争当時（一九六五年前後）、東京で学生生活を送っていた。そのころ学生運動がとても盛んで、「アメリカはベトナムから出ていけ」といった集会やデモにはよく参加した。忘れもしない一九七五年四月三〇日、ベトナム解放戦線によってついにサイゴンが陥落し、アメリカは退却を余儀なくされたのである。テレビの放映を見ながら、身体が震えてくるほどの感動を覚えた。

南北の統一と祖国の解放を求め、ベトナム人の捨て身の抵抗が世界最強の軍事力を持つアメリカをベトナムから追放したのである。そんなベトナムを一度是非訪問したいと思っていた。そんなエネルギーがどこに潜んでいるのだろうかと。

わずか八日間という短い期間ではあったが、ベトナムの働く女性の姿を通して、そのエネルギーの一端を感じ取った。それは、大胆かつしなやかで、人に対する誠実さのこもった店員のしぐさがそうだった。商店街で仕事に従事しているのは、ほとんが女性ばかりで、男性はレストランの給仕、手工場的な鉄工、土木作業、トラックの運転などである。市内をバスで通る度に目にするのは、店の前の舗道で新聞を読んだり、談笑したり、タバコを吸いながら通る人を眺めているのは男たちばかりである。ベトナムは男たちにとっては実に平和でのんびりとした世界なのだと思った。

（うちやま　ゆうへい・県民教育研究所所員）